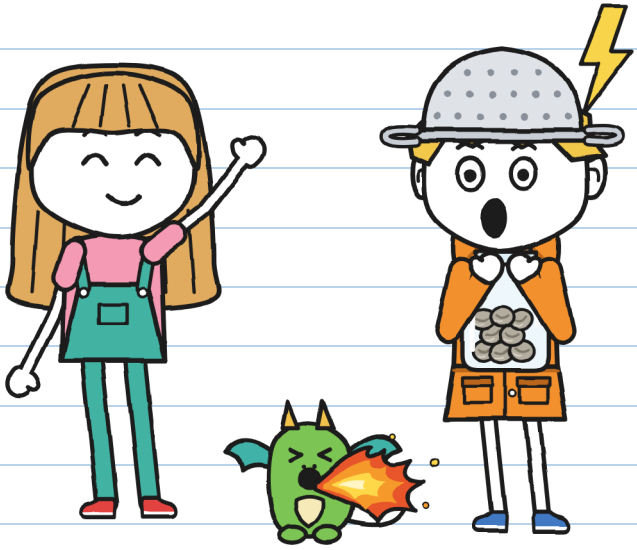
ありえない はいたつ・2

かみなり まえに あけるな

Lui Eriksson



（グニの ノート）

サイズ S
初級・7+

ありえない はいたつ ・ 2
かみなり まえに あけるな

文と絵：Lui Eriksson

サイズ S ・ 初級 ・ 7+

日本語版：LinguAula

初版：2026

© 2026 Lui Eriksson · info@linguaula.com

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズの 2さつめ。1さつめは「このにもつは かみつく」。

LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この 本(ほん)の 中(なか)で、けがを した かみなりは いない。 —J.



そして、ほかの だれの ものでも ない。 ー。

見(み)つけても、かみなり 前(まえ)に あけちゃ だめだよ。

おはなしの なかだけ

この はんこは、お話(はなし)の 中(なか)だけの ことを しめす：きみは やらないで。何(なん)ページも つづく ときは、「ここから」と「ここまで」が 書(か)いて ある。本当(ほんとう)の あらしの ときは、76ページを 見(み)て。 ーJ.

だれが だれ？



グニ。どようびの
はいたつやさん。あらしの
ハンター（まあ、だいたい）。
この ノートは グニの。



フリータ。いなびかりから
かみなりまでの びょうすうを
かぞえる。みどりで かいて、
「J.」と サインする。



パンくず。ドラゴンの こ。グニの
まねを なんでも する。
ほんとうに なんでも。



トニョ。じてんしゃで
イナズマびんの はいたつを
する。じっぷんで とどかなければ
タダ。



フローラ。うんがどおり9ばんちの
にわし。いしには サインしない。

ベラさん。フローラの いえの
となりの ドラゴンの いえで、
ドラゴンの せわを している。
パンくずは ベラさんと くらして
いる。



マラさん。「ありえない
はいたつ」の てんしゅ。まじょの
ぼうしを かぶっている。いうより
ずっと おおくを しっている。

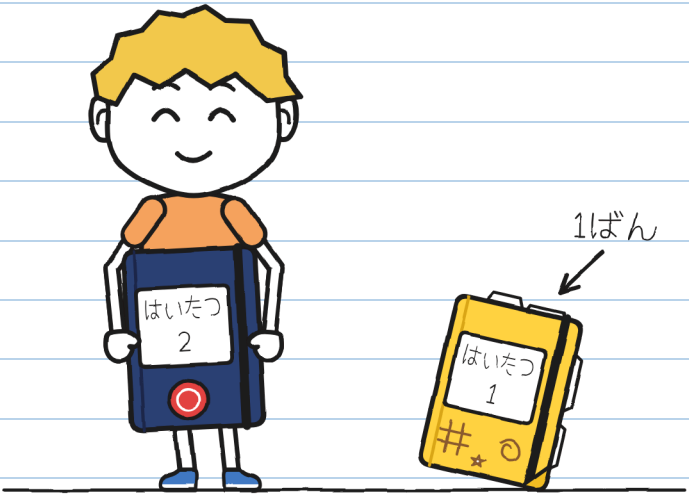


R.は、だれにも とどけられない
にもつを おくるひと。その
なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート2

こうしき。

「こうしき」は、わたしが 先(さき)に 読(よ)む。こうしきに。 ーJ.



ノート1は もう いっぱいだ。これは 店(みせ)の マラさんが
くれた。店(みせ)の はんこが ついている。こうしきの
ノートに 絵(え)を かいては いけない そうだ。
さあ、どうかな。

第1章
あらしの ハンター

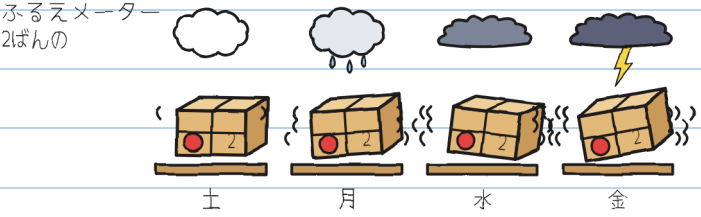
マラさんの 店には、ふるえる にもつが ある。一日ごとに、少しずつ ひどく なる。

ぼくは さわらない つもりだ。

前に フリータと ぼくが とどけた のは たまごだった。

今は パンくずと いって、はねが あって、ぼくの まねを 何でも する。

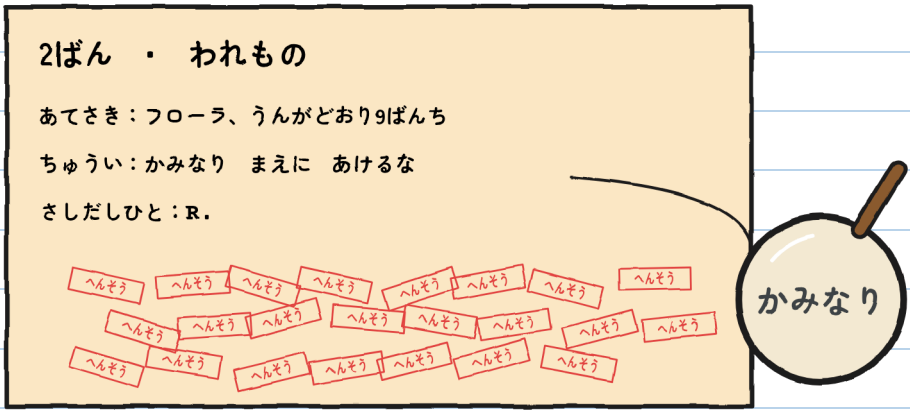
店の 中、ぼくの 家の むかいには、もどってきた にもつが あと 十九こ ある。ひとつは とても いそいで いる。



こわいんじゃ ない。あらしが 来るの。土曜日の 午後六時。

てんきよほうを 六回 見た。 —J.

へんそうされた にもつは、かならず もどってくる。
うけとった 人は、きえない インクで ラベルに
サインを しなければ ならない。フリータの みどりの
ペンのような インクだ。しないと、夜明けに とんで
たなに もどる。ぜんぶ おくるのは 同じ 人：R.



2番の にもつには、「へんそう」の はんこが 二十三こ
おされて いた。

二十三。二回 数えた。 —J.

「二十三回、わたしが はこんだ」と マラさんは
言った。「でも あらしの 日は いちども なかった」

土曜日の 十時、マラさんは 2番の にもつを もって
ぼくたちを まっていた。トニョも いた。土曜日は
三人とも ばつの 日だ。1番の にもつを かってに
とどけた からだ。店の 手つだいを する。

「これは」と マラさんは 言った。「あなたたちが
とどけるのよ。今日の 午後に」

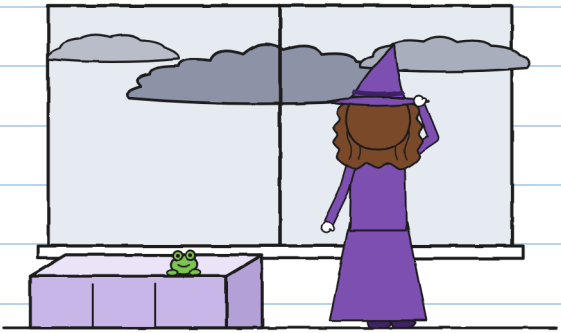


フリータは 大きく ジャンプした。「のこり19」の
ふだに もう少しで さわる ところだった。

マラさんは 三つ じょうけんを 出した。
ゆびで 数えながら：

1. 五時に しゅっぱつ。あらしが 来る 前に。
   すぎるまで フローラの 家に いる こと。
2. かぞくは もう 知っている。フローラも。
3. ラベルの きまり：かみなり 前に あけない。頭の
   上の かみなりは いいが、遠くの は だめ。

「マラさんは 行かないの？」と フリータが 聞いた。
「わたしは ここに やる ことが ある」と マラさんは
言って、ショーウィンドウから 空を 見た。空は
だんだん はいいろに なっていた。



やる ことって なに？ —J.

そのとき フリータが ぼくを 見(み)た。

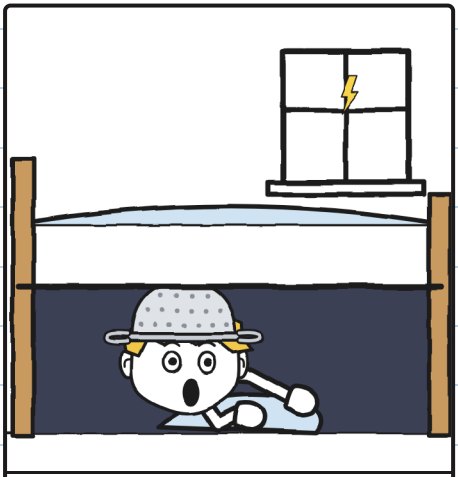
「あらしは すき？」

こう 見(み)られたら だれでも 言(い)う ことを 言(い)った：

「だいすきだよ。前(まえ)の 町(まち)では、プロの あらしの ハンターだったんだ」



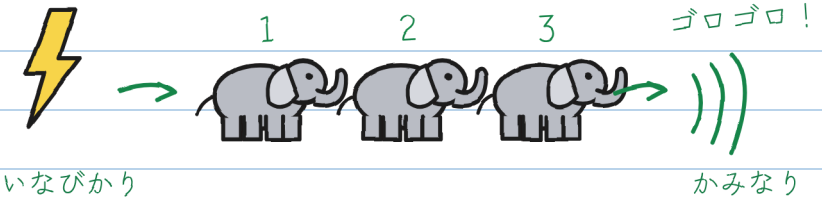
いった こと



ほんとうに おきた こと

ベッドの 下(した)の プロだね。 ーJ.

フリータが あらしの 数え方を 教えてくれた。ぼくの
ノートに。かってに。いつもの ことだ。



ぞう1とう、ぞう2とう、ぞう3とう……

ぞう1とう＝1びょう

ぞう3とう＝1キロ（だいたい）

ぞう0とう＝まうえ！

↖ これが ラベルの かみなり。
とおくの かみなりでは あかない。

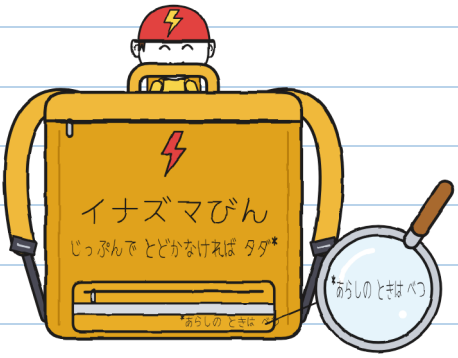
ぞうが おおい ほど、その いなびかりは とおくに おちた。

かみなりが きこえたら、とおくても：なかへ！

知っている ことは、こわさが へる。 —J.

ぼくは 数えなくても いい：あらしは だいすきだから。
でも ねんの ため 書いておいた。

トニョが ぼくの かたごしに ラベルを 読んだ。
「イナズマ便は、あらしの 日には とどけない」
トニョは リュックの 小さい 字を 見せた。
「まだ あらしじゃ ないでしょ」と フリータ。
トニョは 見直した。「まだ」とは なかった。

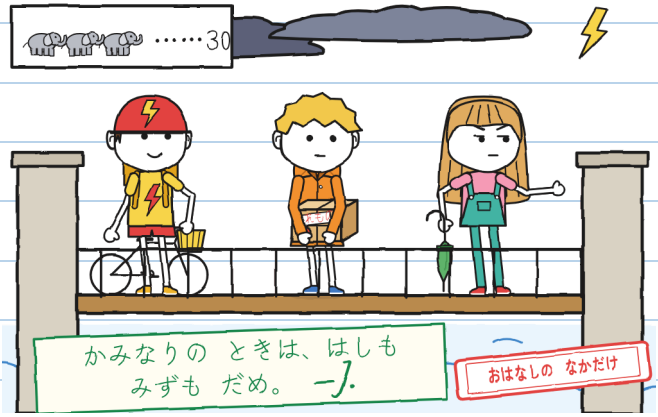


小さい 字は、小さすぎた。 —J.

トニョは ぼくたちと いっしょに 来た。
五時に 家へ 行って、レインコートを とって きた。
「オレンジのを きて いきなさい」と お母さん。
「ほんとうに 行くの？ かみなりが 鳴ると……」
「いってきまーす、お母さん！」

「鳴ると……」って？ —J.

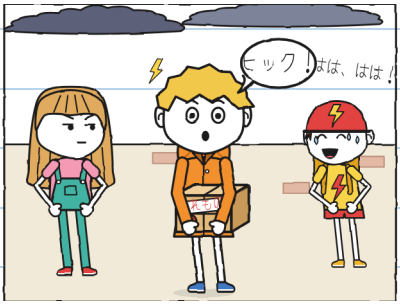
ぼくたちは おおはしを わたった。夜には 船が
通れるように はしが 上がる。空は ますます 黒い。
まん中で、フリータは 手を ふって 水に
あいさつした。まじめな 顔で。うんがと フリータは
なかが わるい。



遠くで、空が ぴかっと 光った。フリータは ぞうを
30とう 数えた。
ゴロゴロ。
「あの いなびかりまで 十キロくらい ね」
と フリータは 言った。「てんきよほうだと、
あらしは 六時ごろ」
「かみなりが 鳴った！」と トニョが 言った。「もう
あけて いい？」

「あれじゃ にもつは あかない」と フリータは
言った。「ラベルのは ぞう0とうの やつ。でも もう
聞こえる。中に かくれよう！」
うんが通りまで 走った。ぼくは 聞こえない
ふりを した。

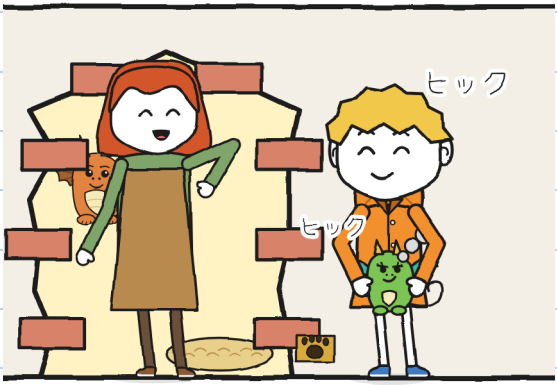
「今の、ヒック？」と フリータが 聞いた。
「ちがう」と ぼくは 言った。「ヒック！」



小さい ときから、かみなりの ときだけ。
かみなりごとに、しゃっくりが つづく。さんびょうに
一回。あらしが まうえに 来ると、止まらない。
こわいんじゃ ない。体が 聞かずに やるんだ。

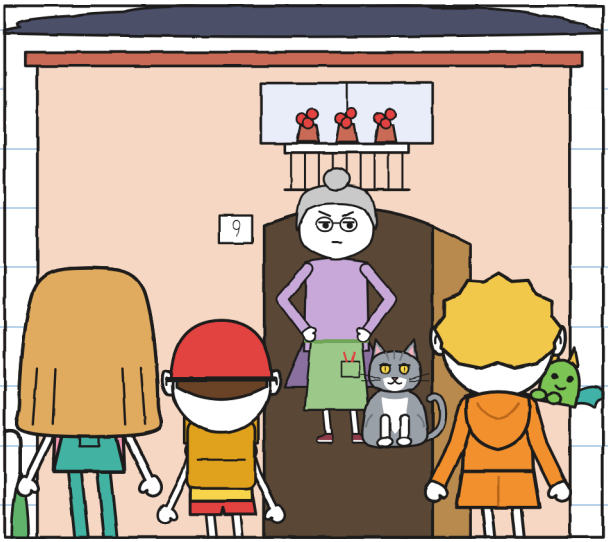
それを こわいって 言うの。 —J.

ベラさんは 入り口で、パンくずを だいて まって いた。土曜日は、パンくずは ぼくと さんぽだ。
「今日は フローラの 家までよ。はじめての あらしなの」と ベラさんは 言って、パンくずを わたして くれた。「グニの まねを 何でも する。気もち まで。おびえても、引っぱっちゃ だめ：しがみつくから。あらしが すんだら、へいを 三回 たたいて。すぐ 行く」
「ぼくは 何も かんじないよ」と ぼくは 言った。
「あらしは だいすき なんだ」



遠くで かみなりが 鳴った。ぼくは ヒック。パンくずも ヒック。はなから けむりが 出た。
「すぐ 中へ！」と ベラさんが 言った。

フローラの 家は、ゼラニウムの 家だ。二週間まえの
土曜日、フローラは あの ベランダから ぼくたちを
見ていた。ぼくたちは ドラゴンの 家の 入り口を
さがして いた。あの 入り口は、かべみたいだ。

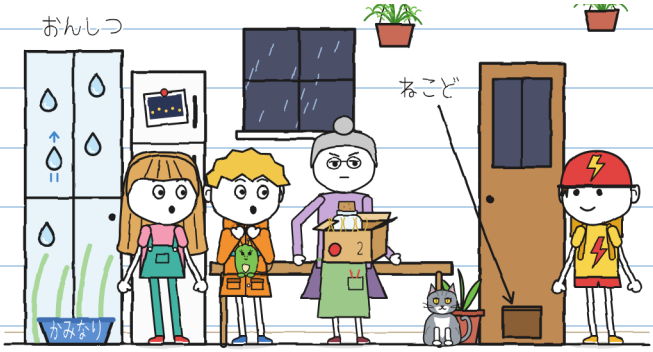


フローラは ドアを あけた。ノックする ひまも
なかった。フローラは はこを 見て、空を 見て、
パンくずを 見た。
「ベラの ところの 子ね。わたしの シダを
こがさないでよ」と 言った。「入りなさい、雨が
来るよ。先に 言って おくけど、わたしは 石には
サインしないからね」

しょう
第 2 章

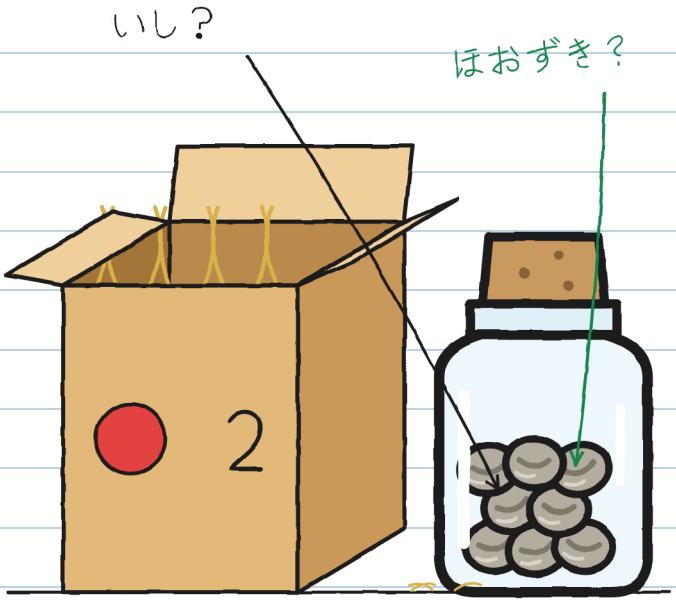
カミナリ！

フローラの だいどころは しょくぶつで いっぱいだ。
おくに ガラスの ドアが あって、おんしつに
つながって いる。うしろの ドアには あめ戸が
あって、にわに 出られる。トニョは 雨なので、
じてんしゃを ろうかに 入れた。



おんしつの ガラスには、かいた 水の つぶが あった。
おちずに のぼって いく。
「R.の ガラスよ」と フローラは 言った。
「わたしが ほしい ときに 雨を 通す。かみなりは、
ぜったいに 通さない」

フローラは はこを テーブルに おいて、聞かずに
あけた。中には ガラスの びんが あった。はいいろの
小さな 玉が 八つ 入って いる。
「かみなり 前には あけちゃ だめ！」と
フリータが さけんだ。
「あけたのは はこで、びんじゃ ないよ」と フローラは
言った。「なかみは 知ってる。R.は ほおずきを
くれるって 言って、石を よこすの」



「ほおずきって なに？」と ぼくは 聞いた。

フローラは 古い しゃしんを 見せた。夜の
うんがぞいの 道に、小さな あかりが ならんで いた。



「しょくぶつだよ」と フローラは 言った。
「いなびかりの 光を ためて、夜じゅう てらす」
「R.が うえて いたの？」
「目ざめた たねを もって きたの。わたしは 土。
ねむった たねは 見た ことない」
「ほおずきは？」
「きえたの。R.は 来なく なって、今は これ」

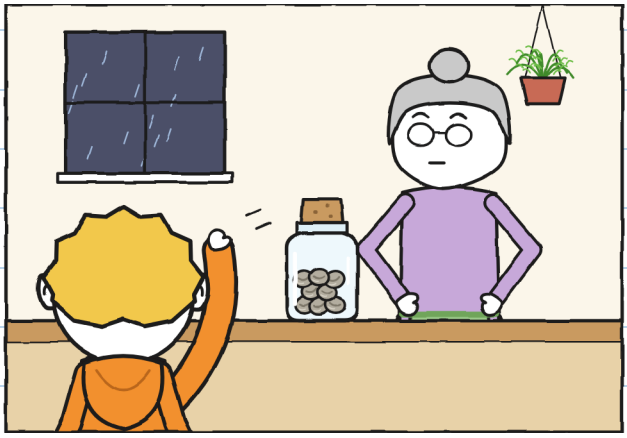
だから うんがは くらく、いたの はしは こわい。
うんがを わたる 一まいの いただ。

こわかった。わたしは とくに：くらやみで わたった。 —J.

「R.は いつも やくそくを まもる」と フローラは
言った。「おそいけどね。でも これだけは ちがう。
この びんは 二十三回 とどいた。二十三回、石だった」

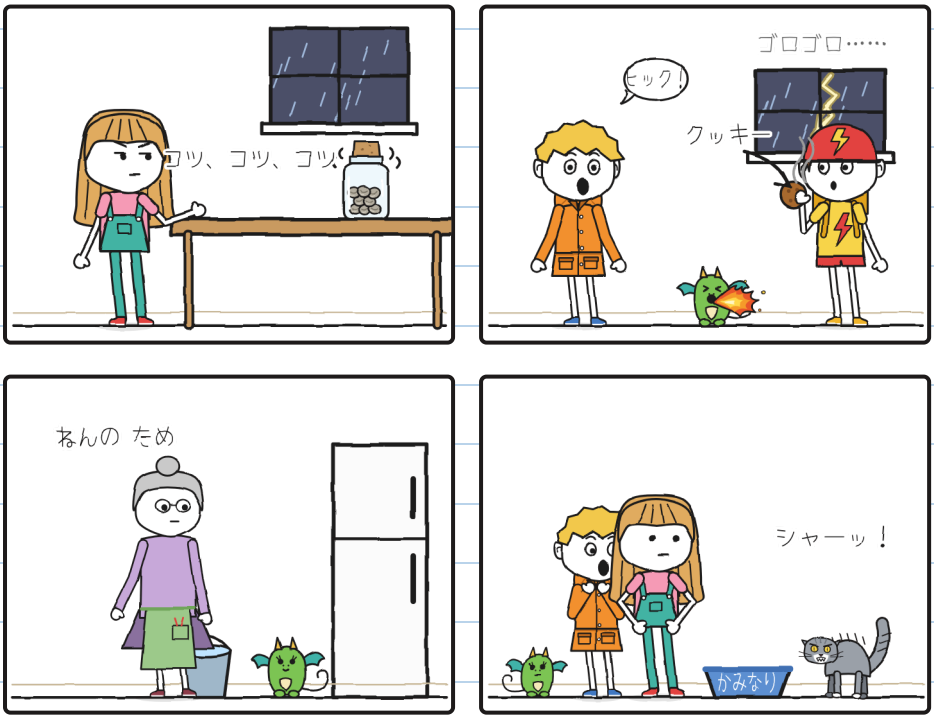
ぼくは ラベルを 思い 出した。かみなり 前に
あけるな。ぜんぶ おぼえて いた。
「フローラさんは、かみなりを まってから あけた
ことが ありますか？」と ぼくは 聞いた。

フローラは、ばかな ことを 聞くと いう 顔で
ぼくを 見た。
「わたしは だれも またないよ」と 言った。
「かみなりだって ね」



フローラの ねこの 名前は カミナリ。名前は
えさ入れに 書いてある。雲みたいに はいいろで、
のどを 鳴らす 音は かみなりそっくりだ。

ぼくたちは だいどころで あらしを まった。小さな
ことが いろいろ おきた：



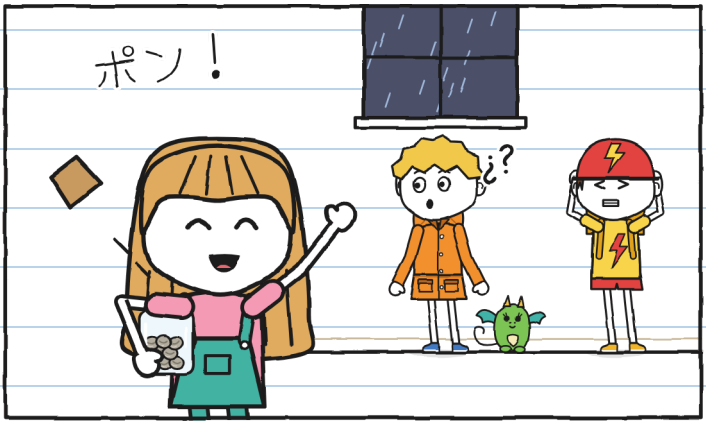
かみなりで いちばん いやなのは、まつ こと。 —J.

びんが チリン、チリンと 鳴る。だんだん 大きく。
フリータは 数えて いた：「ぞう12とう」。
それから：「9とう」。
テーブルの 下で、あしが はねて いた。

「ゆかに あなが あくよ」と ぼくは 言った。
「数えてるの」
「でも あしは 数えるのが はやいよ」
そのとき パンくずが また 小さな 火を ふいた。
カミナリは ねこ戸から にわへ とび出した。フローラは
うしろの ドアを あけて さけんだ：
「カミナリーーー！」



そして フリータが びんを あけた。



「かみなりが 鳴った！」と フリータは 言った。

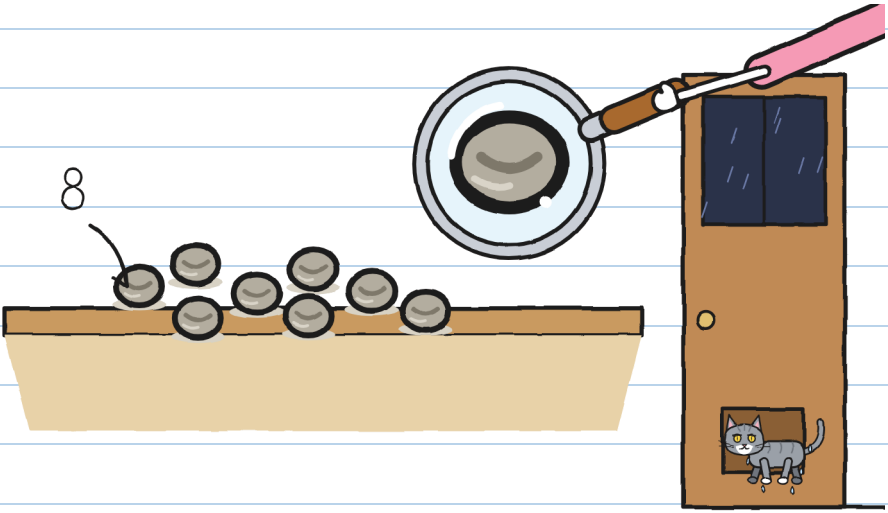
かみなりは 鳴って いなかった。さけんだのは
フローラだった。カミナリは ねこの 名前だ。

「カミナリ！」って 聞こえた。まさに まっていた ことば。
それが ねこだなんて、だれも 言わなかった。 —J.

それを 17ページに はった。

その ページは あとで 読んだ。 —J.

あけたら、びんは しずかに なった。中には
はいいろの 玉が 八つ あるだけ。つめたくて、
うごかない。フリータは 玉を テーブルに ころがして、
虫めがねで 見た。
「すじが ある」と フリータは 言った。
「とじた 目みたい」



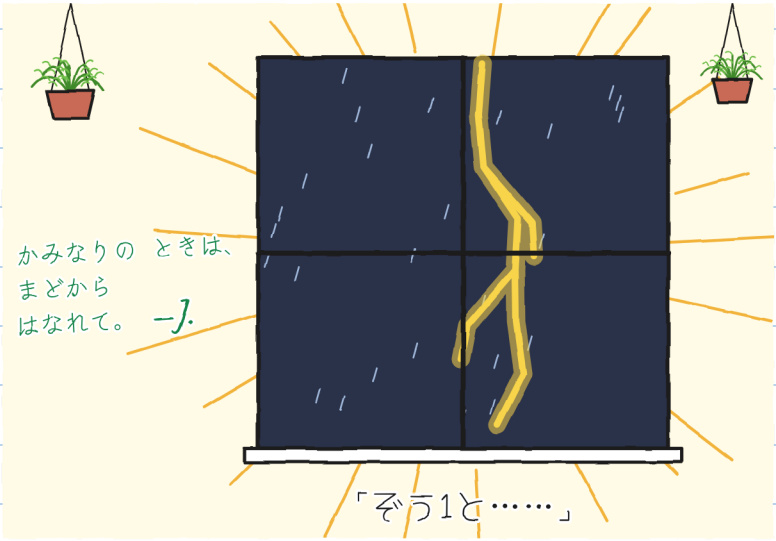
カミナリが ねこ戸から びしょぬれで もどってきた。
フローラは ドアを しめた。
「石ね。いつも どおり」と 言って、フリータを 見た。

フリータの 顔は、シャツと 同じ 色に なった。

「ねむってるんだ」と ぼくは 言った。「石じゃ なくて たねだよ。だから 『かみなり 前に あけるな』って 書いて ある。もしかしたら、かみなりが おこして くれる。ガラスが ふるえるくらい 大きい やつが」

フローラは だまった。それから 言った：
「たねなら、しょうめい してみなさい」

外は もう 夜みたいだった。午後六時。
いなびかり。フリータは 数え はじめた：

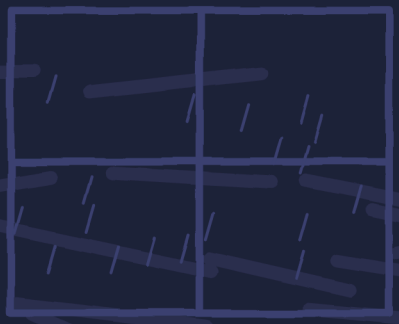


そして ほんものが 来た。



かみなりと いなびかりが 同時(おなとき)だった。あらしは まうえに いる。テーブルも、コップも、ガラスも ふるえた。

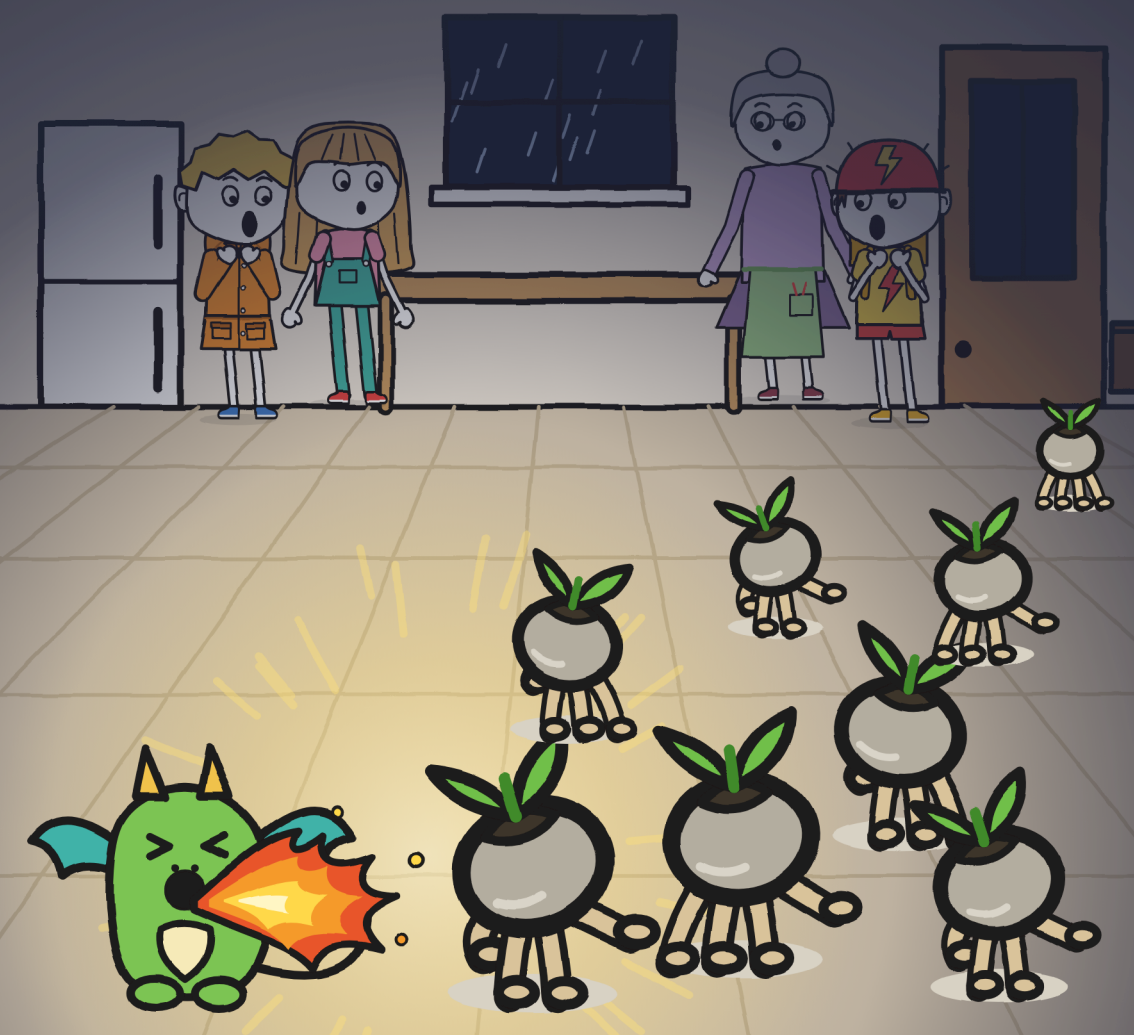
そして でんきが きえた。



ヒック！

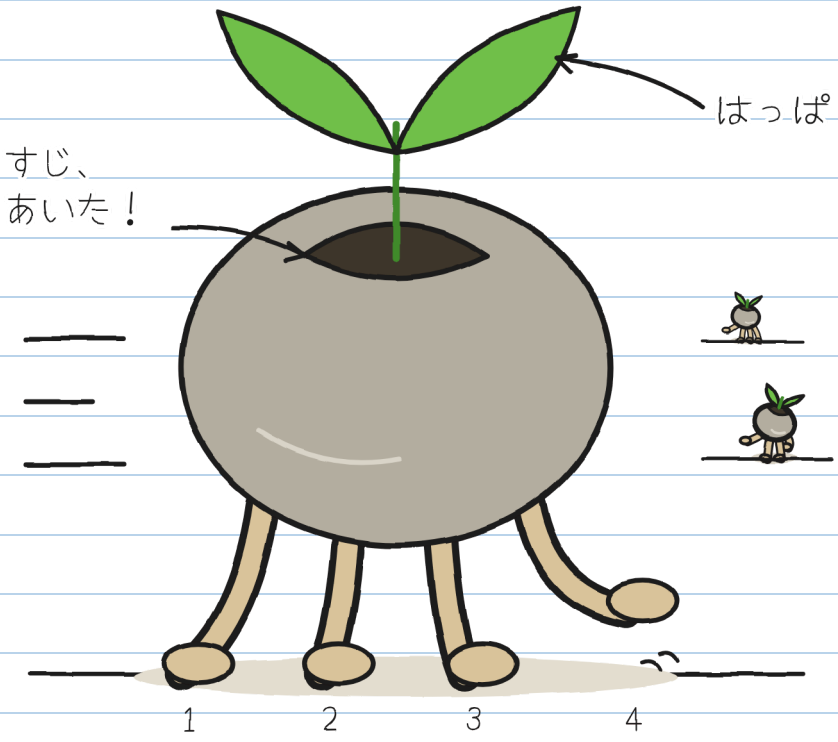
ぼくは ヒック。パンくずも ヒック：ボウッと
大きな 火。一びょうだけ、だいどころ ぜんぶが
見えた。

テーブルは からっぽだった。



ほおずきの たね

（めざめた）



ねの ちいさな あし 4ほん

石(いし)に 足(あし)が あった。

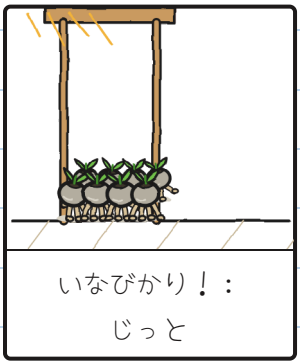
それと、いそいで いる。 —J.

第3章

みないと うごく

くらやみの 中で、小さな 雨の 音が した：トト、トト、トト。もう いちど いなびかり。玉は さっきより 遠くに あった。そして じっと して いた。ぴたっと。何も して いない ふりで。

玉は はやく 走った。でも いなびかりが 光るたびに 止まった。いなびかりは たくさん あった。ぼくは テーブルの 下から 見て いた。フローラの ざるを かぶって。うちでも、かみなりが 鳴ると かぶるんだ。



いなびかり！：じっと



くらやみ：はしる



いなびかり！：じっと。もっと とおく。

だるまさんが ころんだ。たねで。 —J.

フローラは ライトを たねに むけた。たねは
ぴたっと 止まった。
べつの たねに むけると、さいしょの は 走り 出した。

「たねだ！ 目ざめてる！」と フローラは さけんだ。

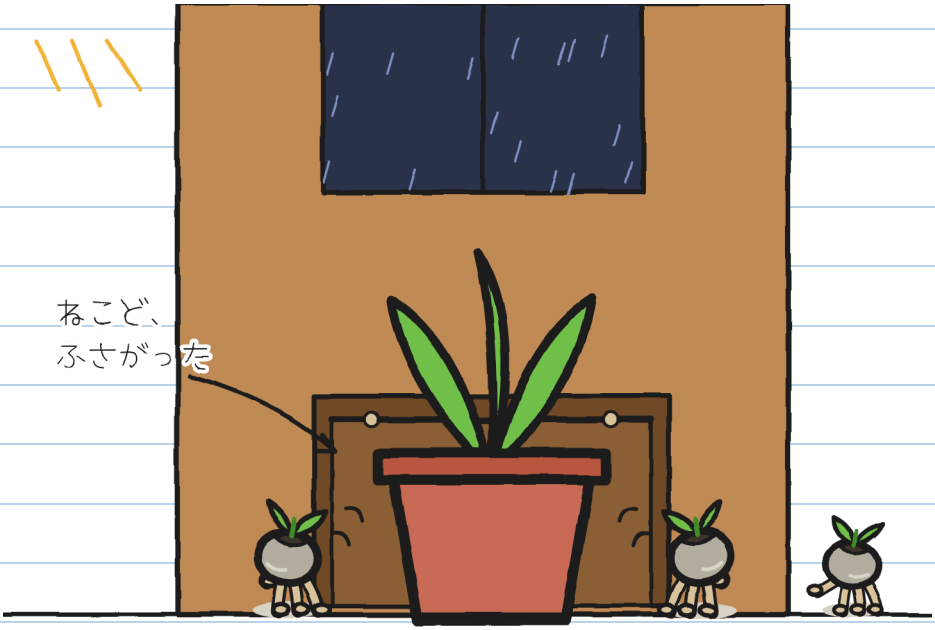


ライトを うごかすと、二つめの たねが 走った。
「もう 一つ ライトが いる」と ぼくは 言った。
「じゃあ ほかの ほうほうを 考えな。
これしか ないから」

光の 中では 止まる。くらやみでは 走る。ライトは
ぜんぶには 足りなかった。

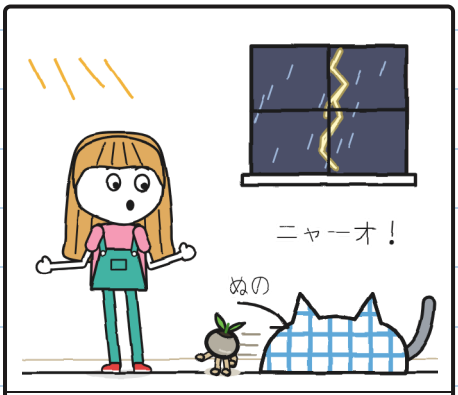
たねは みんな ねこ戸へ むかった。フローラは 大きな はちを おいて ふさいだ。

「あらしの ぬれた 土を さがして いるのよ」と フローラは 言った。「ここに あるのは 水道の 水の 土だけ。外には 土が ほとんど ない。出たら、雨で うんがに ながされる」

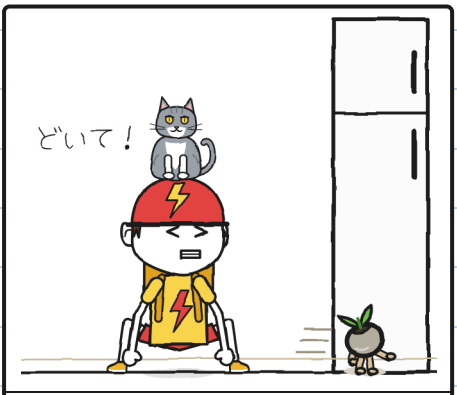


でも 今は だいどころの あちこちに いる。くらやみで。だいどころには かくれる ところが 百も ある。

ありとあらゆる ことを やった：



フリータは、ぬのを つかって
カミナリを つかまえた。



トニョは てで：カミナリが
トニョを つかまえた。



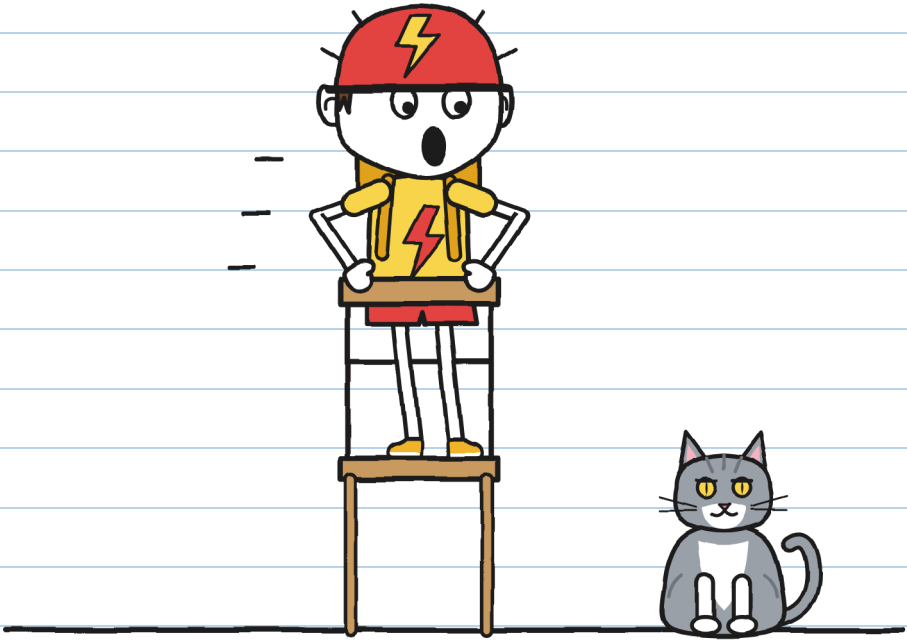
パンくずは、ひで：ひとつ！



フローラは、ライトで：ふたつ！

カミナリも おいかけた。くらくても よく 見(み)える。
ぼくたちは だめ。

トニョは　あらしは　こわくない。こわいのは　ねこだ。

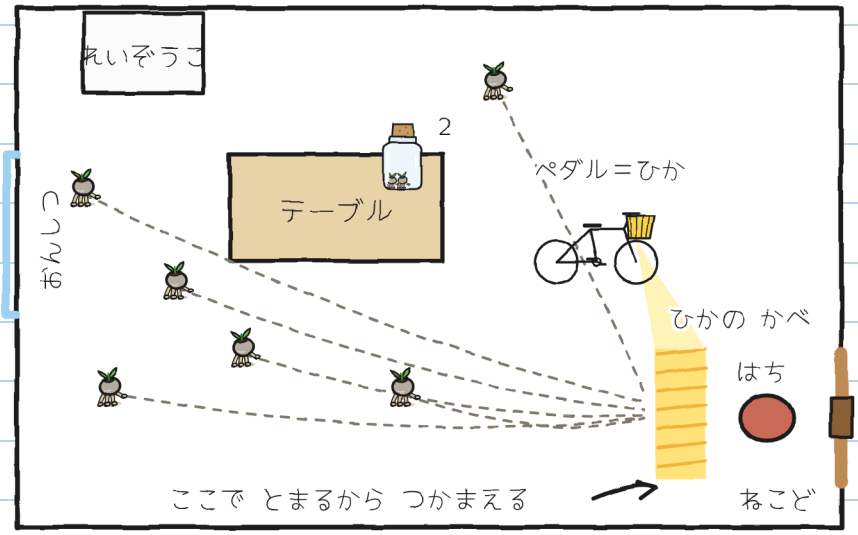


「ねこじゃ　ないって！」と　フリータが　言った。
「カミナリだよ！」
「もっと　こわい！」

びっくりが　二つ、名前は　ひとつ。　—J.

ぼくは まだ テーブルの 下で、ざるを かぶって いた。
そこから 見えた：たねは いつも ねこ戸へ もどる。
はちが じゃまを して、たねは おして いた。

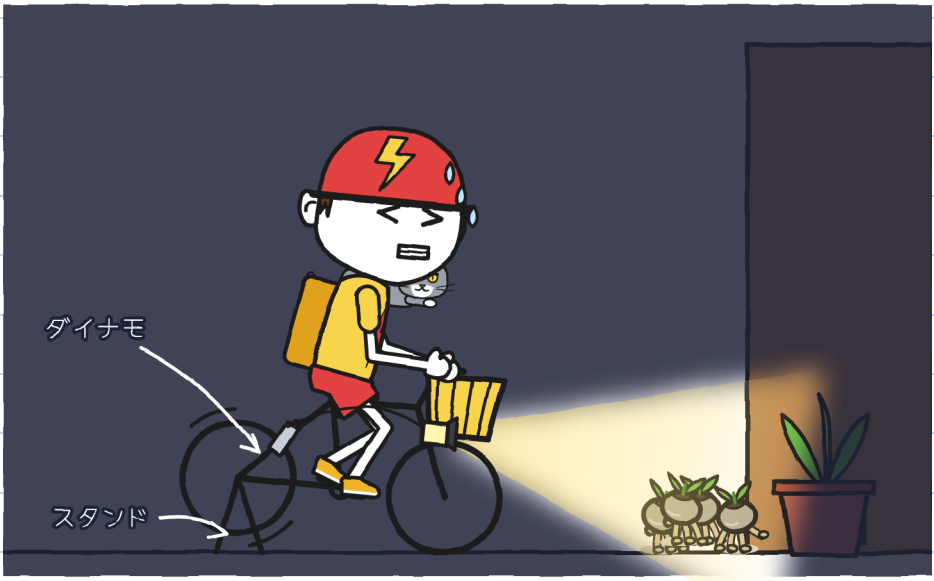
ぜんぶ。同じ ばしょへ。
ぼくは 地図を かいた。



「トニョ、ライトは ペダルを こぐと つく？」
「もちろん」
「じゃあ、今日は 光を はいたつ して」

じてんしゃを スタンドで 立てた。ライトは ねこ戸を むいた。イナズマ便の ライトは ダイナモで つく：しゃりんが 回れば 光る。そして トニョが こいだ。

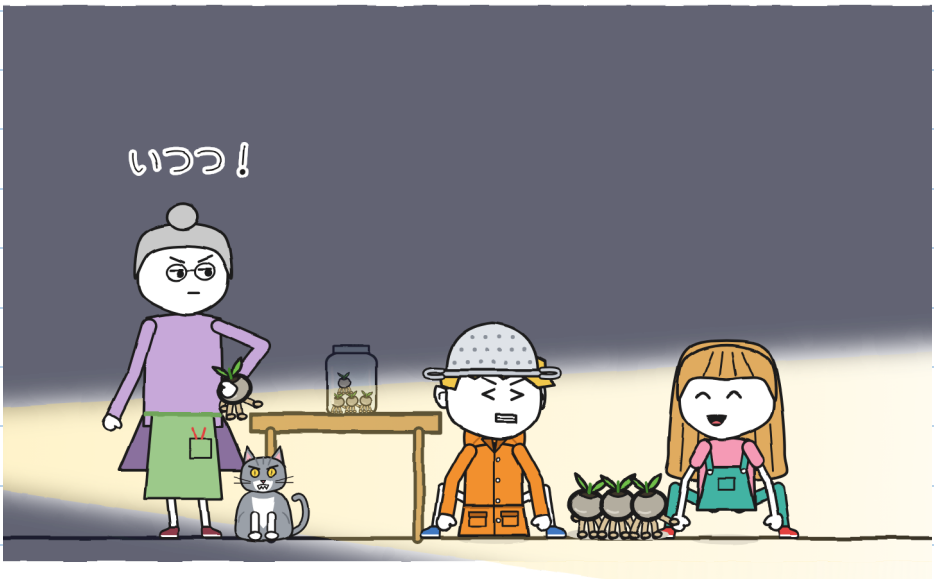
トニョは いままでで いちばん はやく こいだ。
とくに、カミナリが 上に とびのった ときは。



ついに イナズマ便が やくに 立った。 —J.

たねは 光の ところへ 来ると 止まった。ぼくたちは
一つずつ つかまえた。びんの 中へ。三つ。四つ。

カミナリも 口で 一つ つかまえた。フローラは
ゆび二本で とり上げた。
「五つ！」と 言った。



六つ。

フローラは びんに ふたを した。これで
にげられない。それから ぼくたちを まつだおうと
かがんだ。すると カミナリが テーブルに とびのって、
びんを たおした。

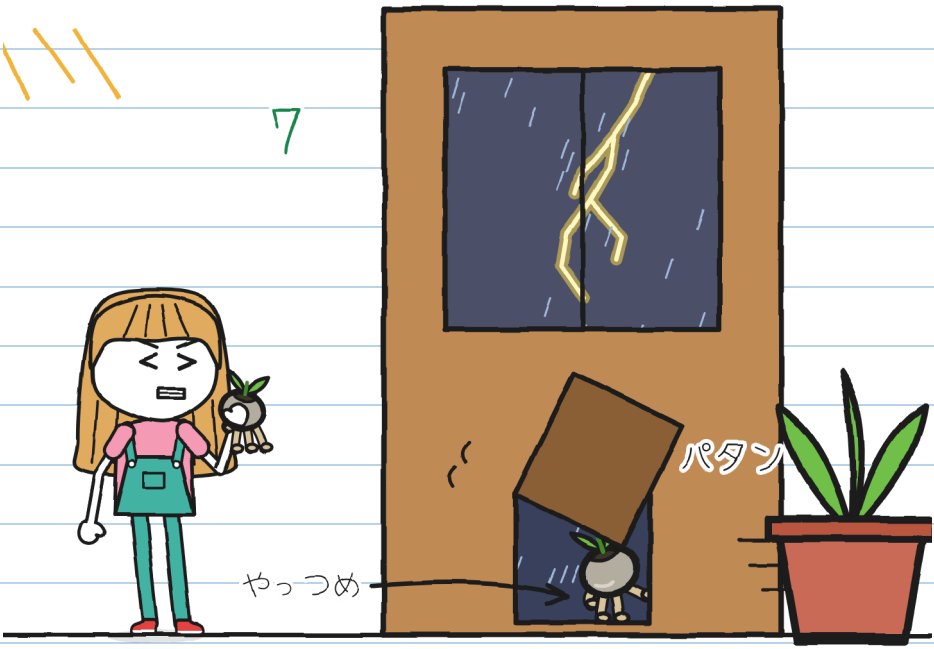


トニョは 空中で つかまえた。
「イナズマ便」と トニョは 言った。「一びょうで
とどけなければ タダ」

でも トニョが こぐのを やめた。ライトが きえた。
そして カミナリは ねこ戸へ 走って いった。

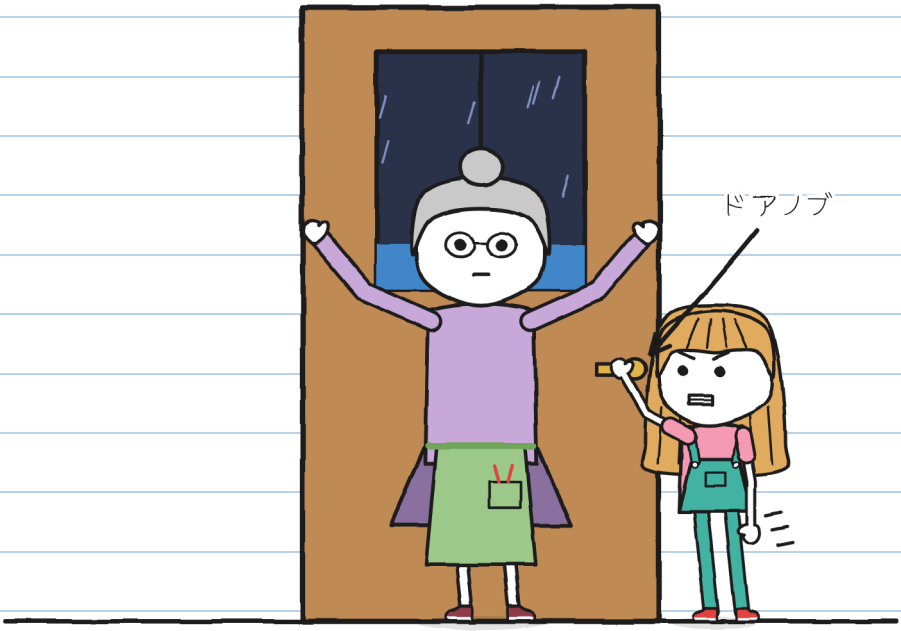
くらやみで：トト、トト、トト。カミナリが はちを
おした：ゴトッ。そして ねこ戸が パタン。

また いなびかり。ゆかには たねが 一つ のこって
いた。フリータが つかまえた。七つ。



八つめは ねこ戸から 出て いった。

「とりに 行く！」と フリータは、ドアノブに 手を
かけて 言った。
「かみなりが おちる ときは だれも 出さないよ」
と フローラは ドアの 前で 言った。とても
まじめな 声だった。



フリータは 言い かえさ なかった。でも ドアノブも
はなさ なかった。
しばらくして、ねこ戸が パタン。びしょぬれの
カミナリだった。八つめは なし。

「いなびかり…… ぞう1とう、ぞう2とう」
ゴロゴロ。
「2とう」と フリータは 数えた。「まだ すぐ 近くだ」

「じゃあ 今から うえよう」と フローラは 言った。
「あらしが 行って しまう 前に。くらやみで」
「その 中で？」と フリータは 聞いた。
フローラは ガラスを のぼる 水の つぶを ゆびさした。
「まほうは まだ きいている。かみなりは
外に のこる」



それから パンくずを 見た。
「くらやみで」

パンくずが ぼくを 見た。そして ヒック。

第4章

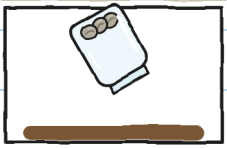
ヒック

フローラが ほおずきの うえ方を 教えて くれた。R.に 教わった そうだ。ぼくは こうしきの 文字で 書いた：

ほおずきの うえかた

1. 

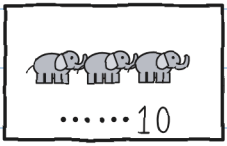
あらしの ぬれた つち。
（みずみちの みずの つちは だめ）

2. 

つちの うえで びんを あける。
（その まえに あけると、にげる）

3. 

ぜんぶ くらやみで：たねは ひとりで つちに もぐる。
（じぶんで うめると、めが でない）

4. 

あらしが すぎる まえに：
ぞうが 10とうより おおいと、
つぎの あらしまで もう うわらない。

目ざめるのは ぞう0とう。うえるのは 10とうまで。
11とうで ねむる。 —J.

フローラが ハンドルを 回した。まどは あかなかった：
かいた 水の つぶが 下へ おり はじめた。
ほんものの 雨が ガラスを 通りぬけて、花だんに
ふった。土が いっぱいの 長い テーブルだ。
「ぜんぶ 花だんへ。ゆかには 一てきも だめ」と
フローラは 雨に 言いつけた。



この ガラスは お話の 中だけ。本当の あらしでは、
おんしつには ぜったい 入らない（76ページ）。 —J.

「あらしの ぬれた 土よ」と 言った。「さあ、ぜんぶ くらやみで」

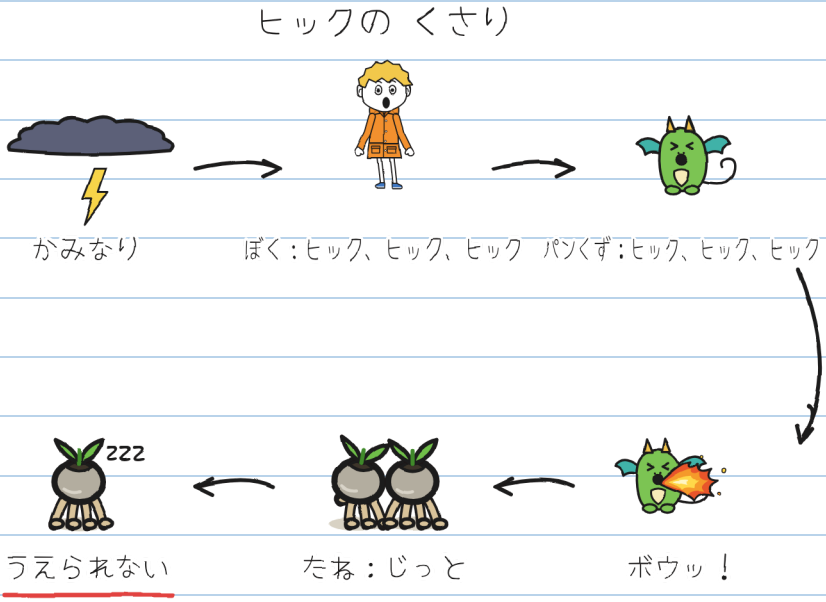
でも パンくずは もう 中に いた。フローラの 足の間を すりぬけて。だれも 見て いない。花だんの下の、はちの 間に いた。

フローラは そっと 引っぱった。パンくずは 四本の足で はちに しがみついた。ベラさんが 言って いた とおりだ。



だいどころの ぼくの ヒックの たびに、おんしつの パンくずが 火を ふいた。

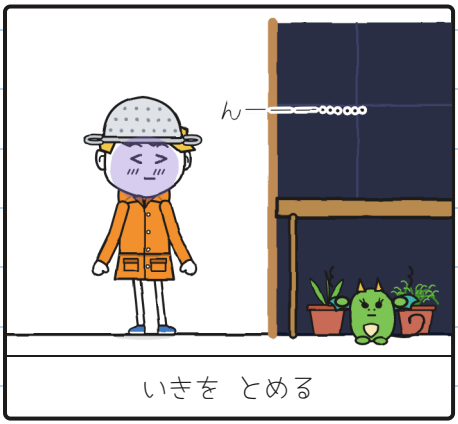
わかるように かいた：



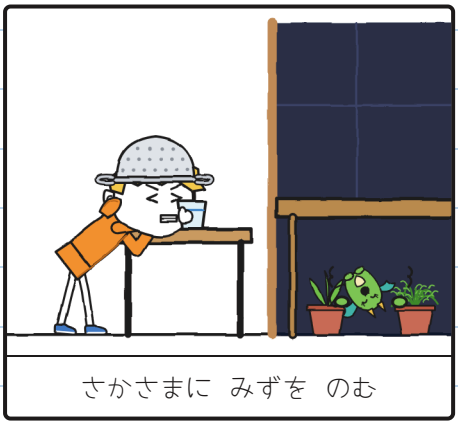
だいどころでは、ヒックが やくに 立った：火、じっとする たね、つかまる たね。おんしつでは ちがう。さんびょうごとに 火が 出る。たねが 土に 入るのに いる くらやみの 時間が、いつも なかった。

くさりを 切らなきゃ。いちばん 切りやすい ところは あなた。あいを こめて。 —J.

しゃっくりの おまじないを ぜんぶ ためした：



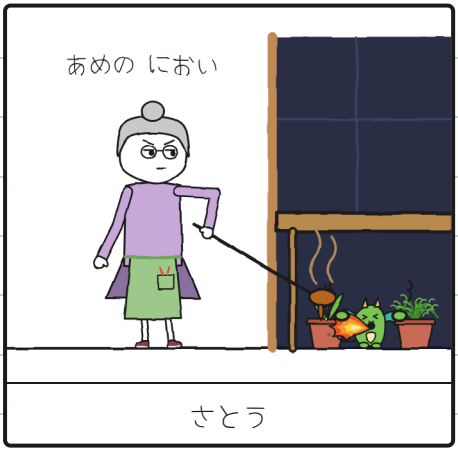
いきを とめる



さかさまに みずを のむ



おどかす



さとう

パンくずは ぜんぶ まねした。はちから はなれずに。

おまじない：ゼロ。ヒック：たくさん。 —J.

「ぞう4とう。5とう」
かみなりが 鳴った。
「あの いなびかりは さっきより 遠いね」と
フリータは 言った。

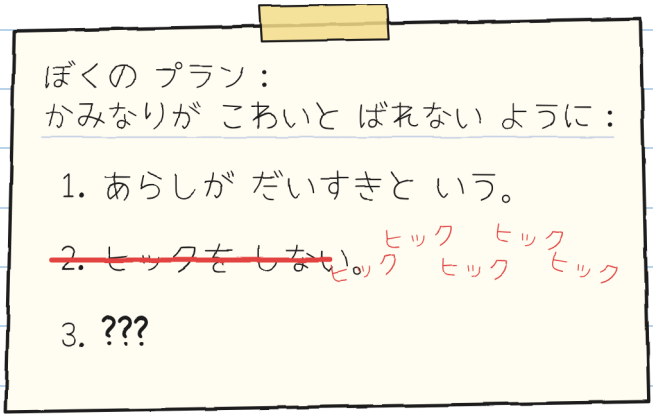
びんの 中で、七つの たねが ぐるぐる 回って いた。
ぼくは ヒック。



「11に なったら？」と ぼくは 聞いた。
フリータは たねを 見た。
「また 石ね」
それから ぼくを 見た。

「パンくずは、グニの こわさを まねして いるの」と
フリータは 言った。
「じゃあ ほかの ものを まねすれば いい」と ぼくは
言って、ヒックした。
「外に 出して あげたら？」と ぼくは 聞いた。
「しがみつくよ。見たでしょ」
フリータは 声を ひそめた。
「まず、そばに いてあげて」

こわさを なおす ほうほうは なかった。かくす
プランが あった。でも もう だめだった：



3は？ —J.

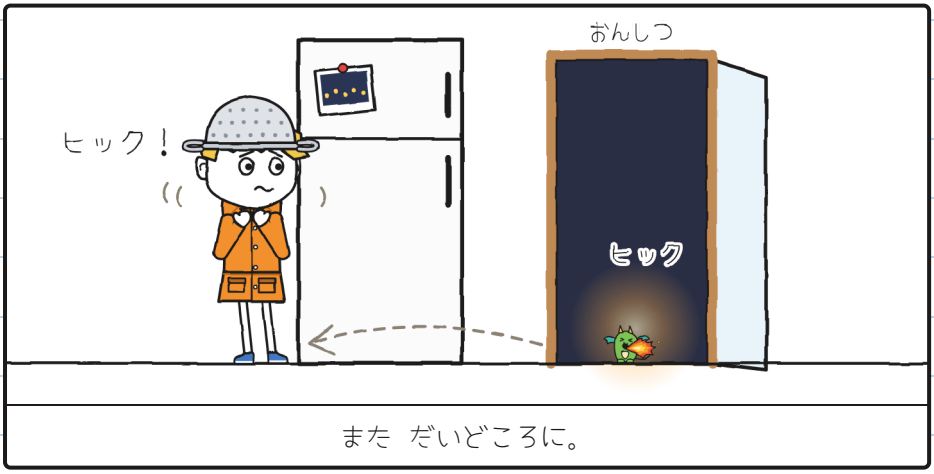
ためした。ほんとうに。



かたあしを　なかに。



かみなり。



また　だいどころに。

おんしつは、町(まち)じゅうで　いちばん　かみなりが　大(おお)きく　聞(き)こえる　ばしょだ。

入り口から 上を 見た。ガラスの てんじょうごしに。
二つの いなびかりの あいだに、やねよりも ずっと
高い ところに 見えた。ベラさんの ドラゴンたちが、
あらしの 中を とんで いる。だれも 空を 見て
いない ときに、とびに 出るんだ。だから ベラさんは
ぼくたちと 来なかった：あらしの ときは、
みはりに のこる。



ドラゴンたちは ヒックを しなかった。

「行こう、あらしの ハンター」と トニョは 言った。

じょうだんを まった。来なかった。

ざるを ぬいで、フローラに わたした。フローラは
ほんものの ヘルメットのように もった。



そして ぼくは 入った。

ざるは かみなりを ふせげない。こわさには、
ときどき きく。 —J.

中では、雨が ガラスを 千本の ゆびで たたく ような
音を 立てて いた。ぼくは はって 花だんの 下に
もぐった。パンくずは そこで まるく なって、
ぼくみたいに ふるえて いた。



ゴロゴロ！ ぼくは ヒック。パンくずも ヒック。火が
ぼくたち 二人を てらした。

ぼくたちは、花だんの 下の あらしの ハンター 二人。

入り口から、フリータが 小さな 声で
言った。わらわずに：



「かぞえよう。わたしが いる」

第5章

かぞえよう、わたしが いる

そして ぼくたちは 数えた。フリータは 入り口で、
ぼくは 花だんの 下で。パンくずは ぼくの
レインコートに ふるえて くっついて いた。

いなびかり。
「ぞう1とう。2とう。3とう。4とう。5とう。6とう」
ゴロゴロ。
「6とうなら 二キロくらい ね」と フリータは 言った。
「あの いなびかりは さっきより 遠くに おちた。
このまま 中に いよう」



ぞうを 6とう 数えた。こわいのは まだ
そこに あった。

「あらしが だいすき」とは、もう 二回 言った。
やくに 立たなかった。
パンくずが ぼくを 見た。
本当の ことを 言って みた。

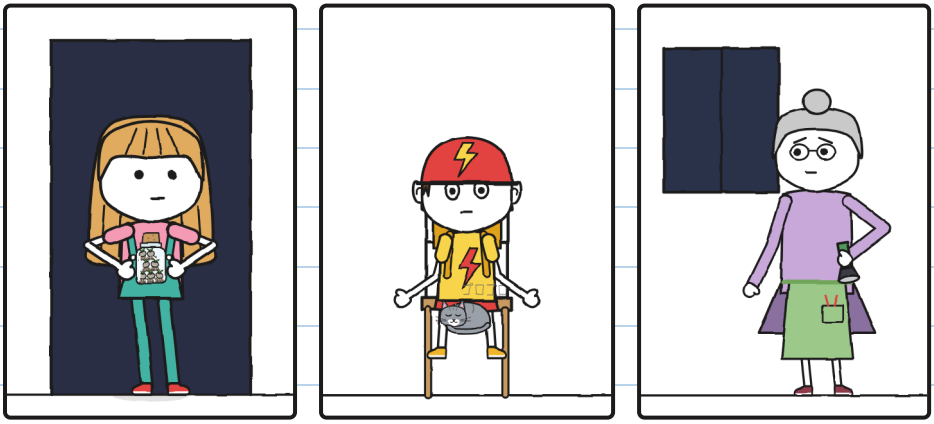


「かみなりが こわいんだ」

「知ってる」と フリータは 言った。「今朝、6ページに かいて いたでしょ。まって いたの」

「おれは ねこが こわい」と トニョは 言った。カミナリは ひざで ねむって いた。トニョは うごけなかった。

「わたしは、来ない ものを まつのが こわい」と フローラは 言った。「だから びんは とどくと すぐ あけて いたの」



わたしは はし。それは 知って いたでしょ。 —J.

だれも わらわなかった。雨(あめ)は 同(おな)じ ように
ふって いた。でも 花だんの 下(した)で、ぼくは もう
ひとりじゃ なかった。

ぼくは ゆっくり いきを した。パンくずも ゆっくり
いきを した。



いなびかり。ぼくたちは いっしょに 九(ここの)つまで
数(かぞ)えた。ゴロゴロ。

そして ヒックは 出(で)なかった。その かみなりでも、
つぎの でも。

「今！」と フローラが ささやいた。

フリータは つま先で、くらやみの 中へ 入った。あけた びんを ぬれた 土の 上に おいた。そして 音を 立てずに 入り口へ もどった。

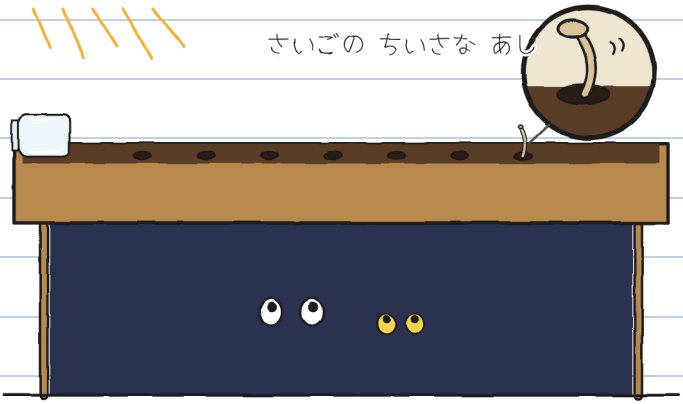


トト、トト、トト。くらやみの 中、びんから 何かが 出て きた。

遠くで いなびかり。ぼくたちは 声を 出さずに、
くちびるだけで 十まで 数えた。ゴロゴロ。

十は、間に 合う さいごの 数。

つぎの いなびかりで、見えた：



びんは からっぽ。土に 小さな あなが 七つ。いちばん
さいごの あなには、まだ 小さな 足が のぞいて いた。

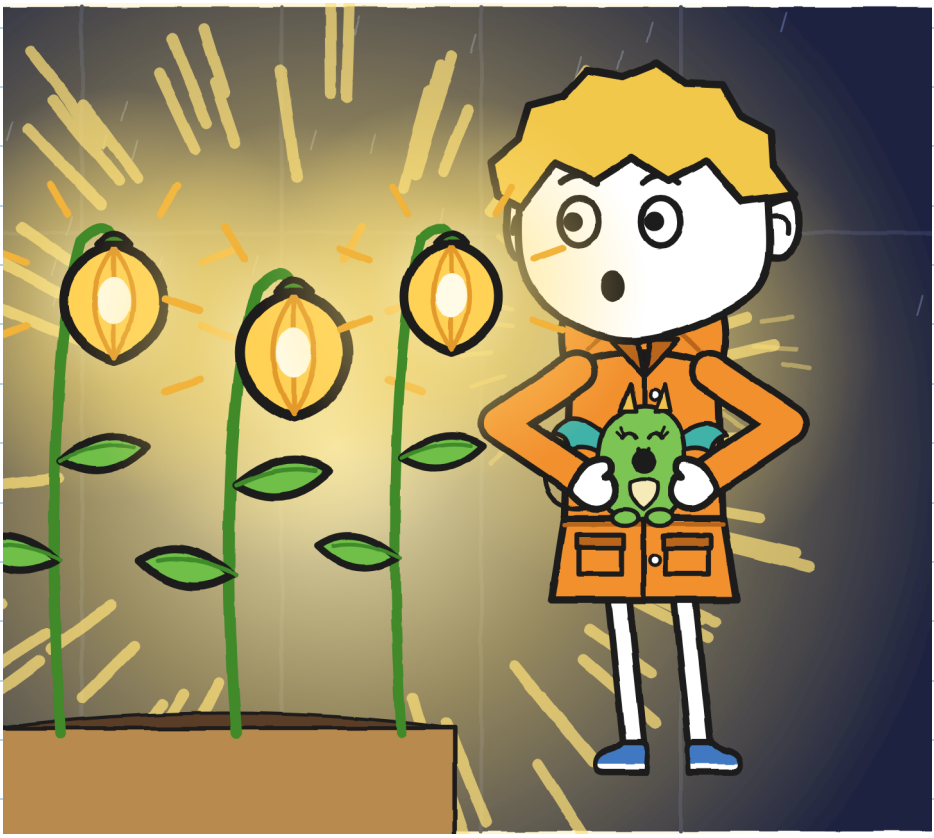
それから、しばらく 何も なかった。ぼくたちだけ、
くらやみの 中で 花だんを 見つめて。

そのとき、さいしょの が 光った。

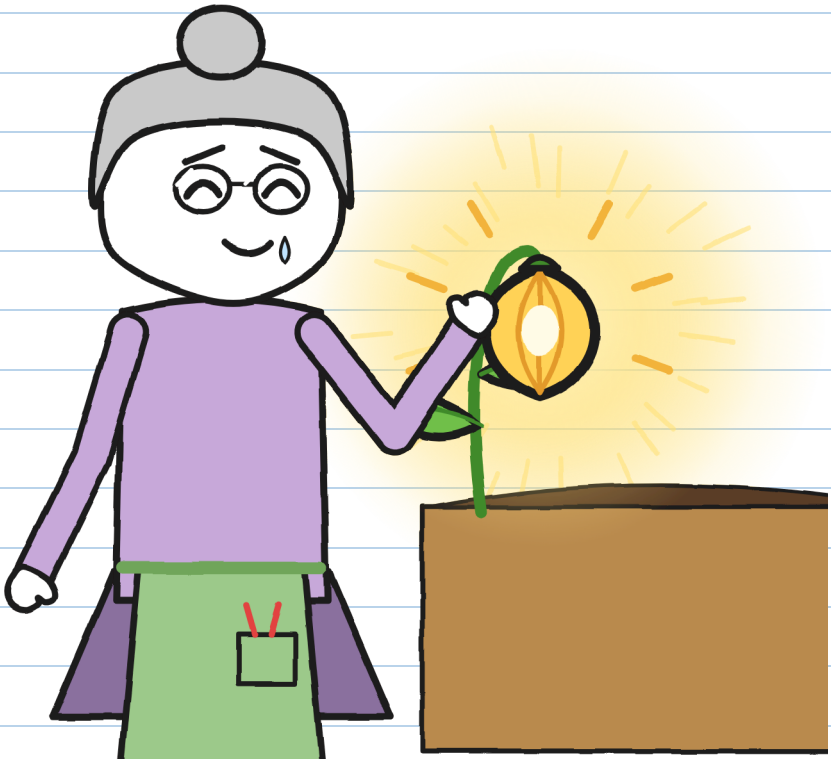
ほおずきが 七つ。どれにも いなびかりの かけらが 中に 入って いた。



パンくずは ヒックしなかった。口を あけて ほおずきを
見て いた。ぼくと 同じだ。もう こわさを まねして
いない。これを まねして いた。



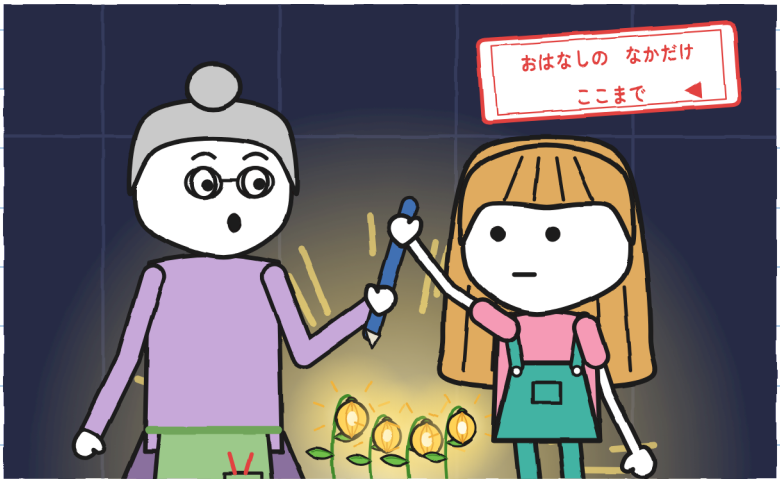
フローラは ずっと だまって いた。それから ゆびの
先で ほおずきに ふれた。ゆっくりと。長く まって
いた ものに ふれる ように。
「うんがぞいの 道は、こんなふうだった」と 言った。



ぼくも さわった。パンくずも。日なたの
石みたいに あたたかかった。

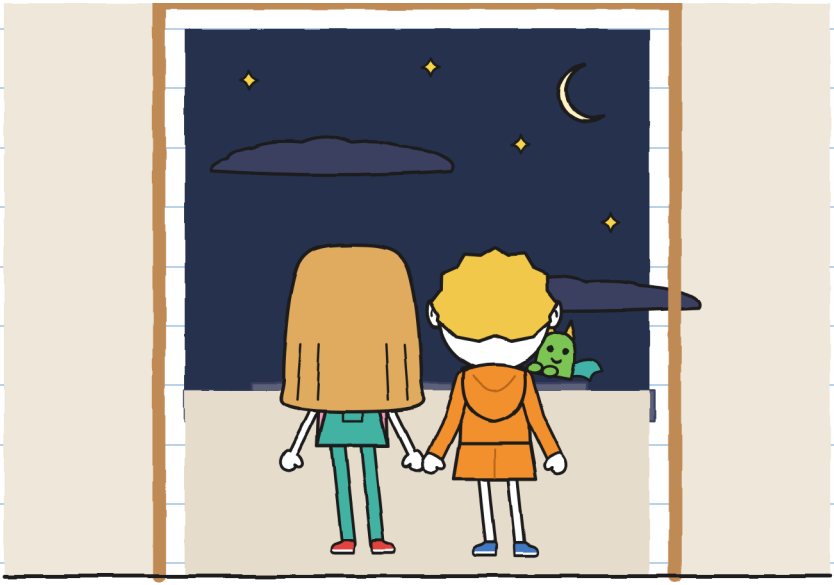
フローラは ハンドルで 雨を 止めた。
それから ペンを 出した。
やっと サインだ。
フリータは ゆび二本で 止めた。

「まだ」
ほおずき七つを 見て、
「一つ 足りない。わたしが びんを 早く
あけた。さがさなきゃ」
それから だいどころへ 行って、はこの ラベルを
はがして、オーバーオールの ポケットに しまった。



とどけるなら、ぜんぶ。 —J.

だいどころに もどった。
「にわの 戸は しめた ままだ」と フローラは 言った。
「まだ 外には 出ないよ」
ぼくたちは まった。フリータは 数える いなびかりが
なくなった。それから さいごの かみなりから さらに
三十分 まった。もう 雨は ふって いなかった。
あらしは 行って しまった。



そして 八つめは 外に いる。どこかの くらやみに。
土が 間に合わなければ、また ねむる。ただの 石だ。
サインが なければ、夜明けに 2番は たなに もどる。

「さがしに 行こう」と フリータは 言った。

フローラは 夜を 見た。それから にわの へいを 三回 たたいた。ベラさんが 言って いた とおりに。あの へいは、ドラゴンの 家の かべだ。



「こんどは」と 言った。「あなたたち だけじゃ ない」

第6章

やっつめ

フローラと ベラさんと、ランタンと じてんしゃで 出た。フリータは からの びんと ラベルを もった。ぼくは パンくずを レインコートに 入れて、頭だけ 出して いた。

にわを さがした。小道も。うんがの ふちも。

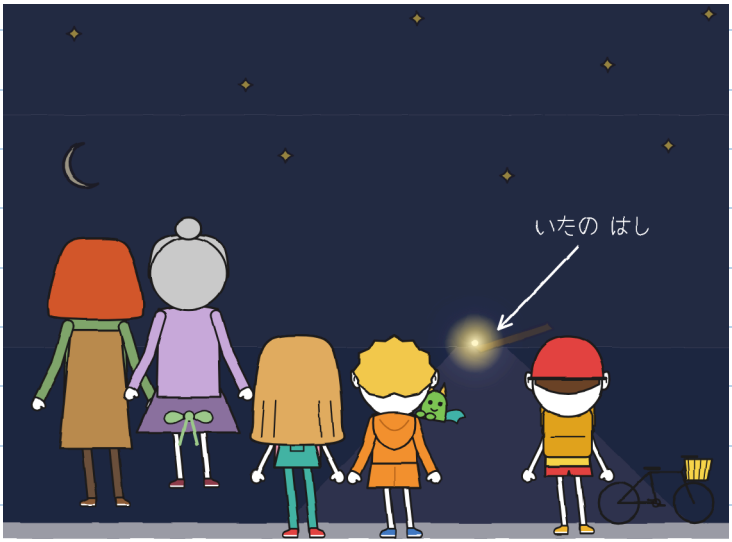


何も ない。

八つめが ねむって しまったなら、あの 石の どれでも ありえる。

ランタンの 光で、ぬれた 石が きらきら 光って いた。
そのとき 気づいた：あんなに 小さい ほおずきは、
ぼくたちの 目に 見えない まま 光って いる
かも しれない。
「まって。あかりを ぜんぶ けして」
トニョは じてんしゃを 止めた。ベラさんは ランタンの
火を 小さくした。フローラは ライトを けした。

ぼくたちは じっと して いた。
道の おくに 小さな あかりが あった。



いたの はしの ふもとに。


たぶん、雨が 小道を 通って 道まで
ながしたんだ。二つの 石の われ目に、ぬれた
土が 少し。いたの はしの ふもとで、ひとりで
ねづいた。遠くからは 小さな あかり。近くでは、
ぜんぶを てらした。

フリータは 長い あいだ はしを 見て いた。あかりが あると ちがって 見えた。ずっと みじかくて、広くて、ただの 木の いた。

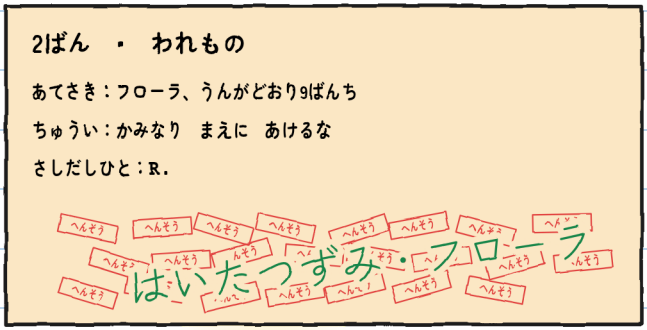
はしに 足を のせた。一本だけ。それから ひいた。

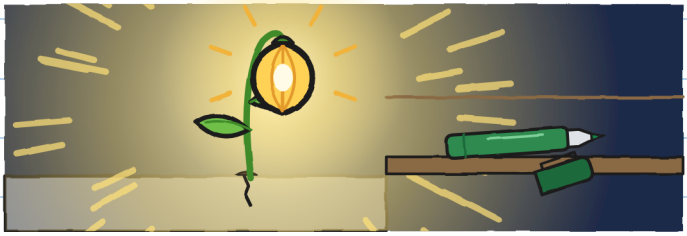


遠くからは、もう こわく ない。近くでも、ほとんど。 —J.

「この 子は ここに のこる」と フローラは 言った。
「自分で ばしょを えらんだ」

フリータは ラベルと みどりの ペンを わたした。
その インクは きえない。フローラは その 場で、
八つめの あかりの もとで サインした。そして
ペンを かえした。





べつれぎわ、フローラが ざるを くれた：
「もって おいき。つぎの あらしの ために。それと、
マラに 言って おいて。やっと だね、って」

ベラさんは パンくずを すに もどした。そして
ぼくたちを バンで 店まで おくって くれた。トニョの
じてんしゃは うしろに。どうろの はしを 通った：夜は
おおはしが 船の ために 上がるから。店の 前で
おろして、ドラゴンたちの ところへ もどって いった。

店は くらかった。カウンターに
マラさんは いなかった。

カウンターの 下に いた。



「もう すんだ？」と マラさん。
「とっくに」と フリータ。

もうふ。みみあて。ヘルメットが ありの 小(こ)なべ。
二十三回(にじゅうさんかい)の はいたつ。あらしの 日(ひ)は ゼロ。
やっと わかった。

フローラの ことづけを つたえた。マラさんは 小(こ)なべを
まゆげまで 下(さ)げた。

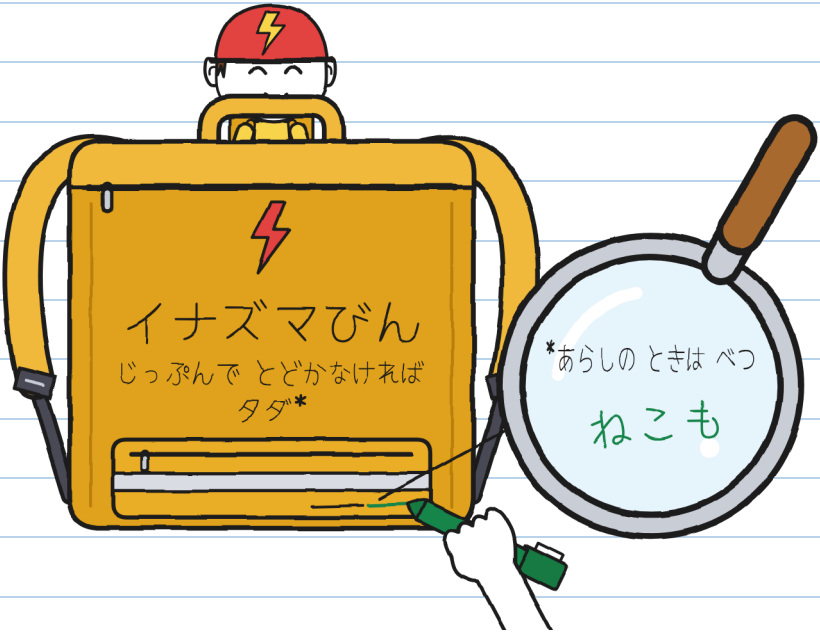
「ぼくも かみなりが こわい」と 言(い)った。
マラさんは もうふを もちあげた。



ぼくも カウンターの 下(した)に もぐった。
ちょうど 入(い)れた。

マラさんは トニョに、ひっくりかえした はこを
おいた。スツールの となりに。
「あなたの ばしょ。今のところは」と
マラさんは 言った。

トニョは すわった。フリータの ペンで、リュックに
二つ ことばを 書き足した：「ねこも」。



今は、小さい 字が 本当の ことを 言っている。 ー].

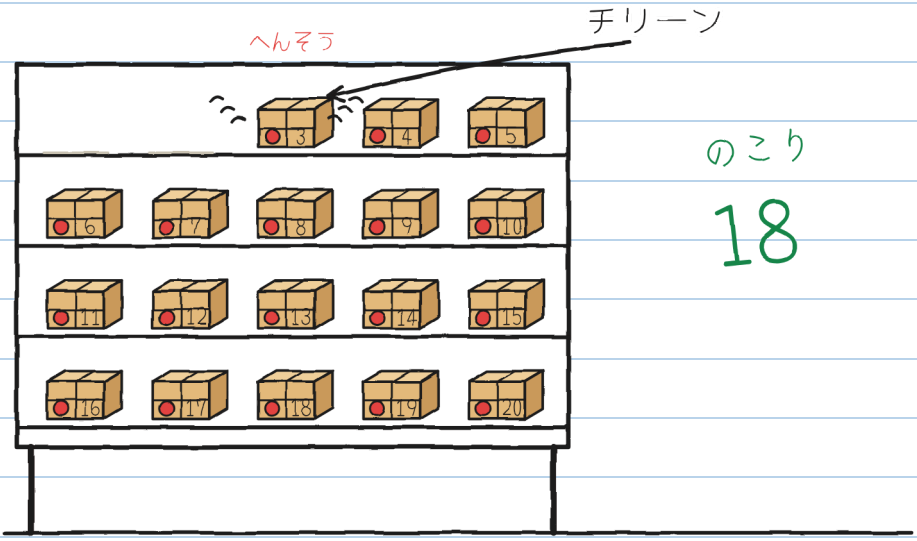
ぼくの プランを 直した。かみなりの ための：

1. ぞうを 数える。
2. だれかと いっしょに。
3. ヒックが 出ても、だいじょうぶ。

のこり



そして、何かの ハンターだと 言わない こと。 —J.

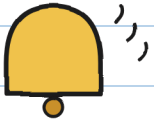


その 夜、家に 帰る 前に、もどってきた にもつが 一つ 鳴った：チリーン。小さな ベルみたいに。3番だ。

ラベルには こう 書いて あった：

3ばん

トニョちゃんへ

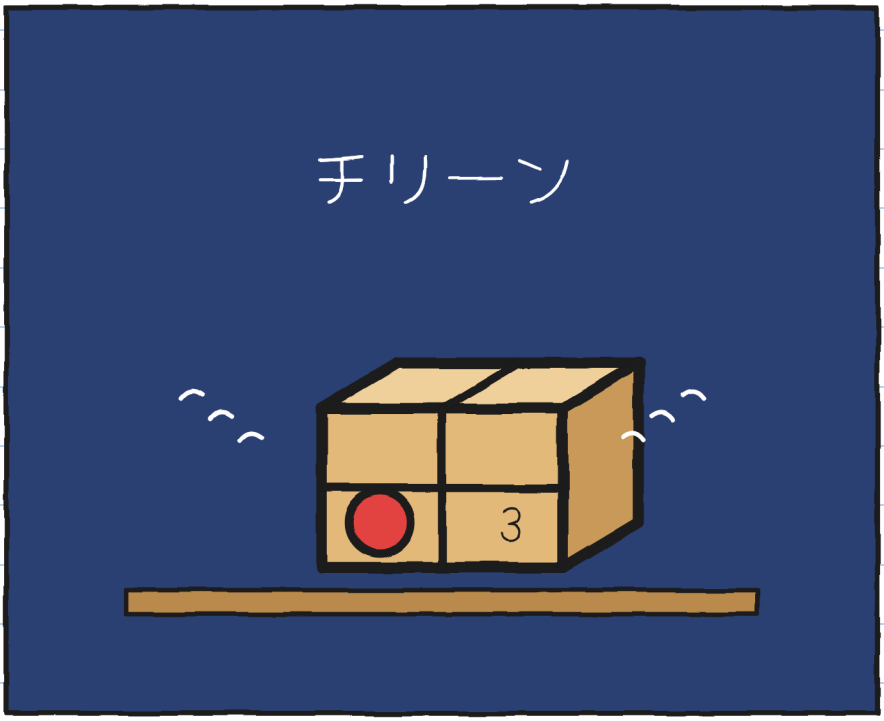


トニョの 顔は、ヘルメットと 同じ 色に なった。



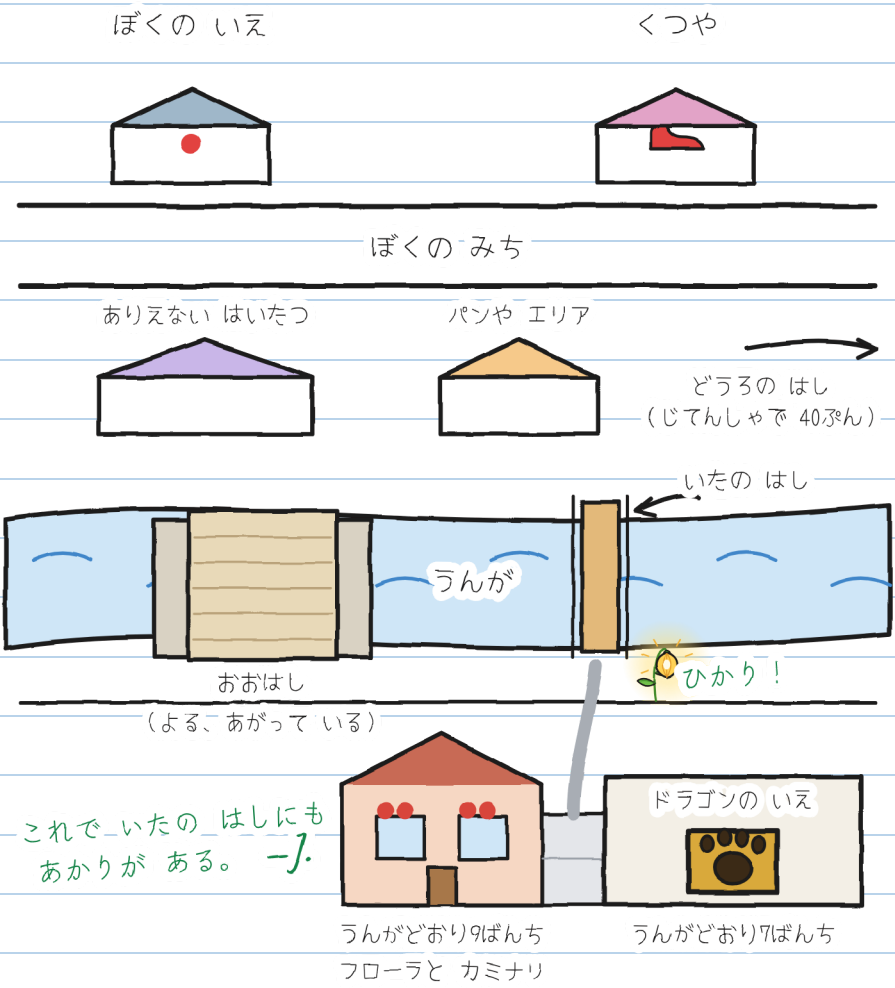
ありえない はいたつ ・3

（もうすぐ）



だれが トニョに にもつを おくって くるの？ ーJ.

まちの ちず（バージョン2）



R.の カードが ある。手がかり1と2は、ノート1の。
新しいのを 書いた：

R.に ついて わかって いる こと



R.

1. ものすごく じが きたない（マラさん）。
2. ベラさんは イニシャルを よんで まっあおに なった。
3. ずっと まえ、フローラと ほおずきを うえて いた。
4. おそくても、やくそくは まもる。
5. フローラの まほうの ガラスを つくった。
6. だれも 名前を 言わない。それも 手がかり。 —J.

きみは？ R.は だれだと 思う？

わたしは、R.は たぶん……

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは 六つ あって、3さいから 16さいまで。ことばは 20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**は ページも 絵も 同じ。**XL**は しょうせつ。ちがうのは 話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
フリータが ななつめの たねを つかまえる。

サイズ XS · A1
ゆかに たねが ひとつ のこって いた。フリータが つかまえた。ななつ。

サイズ S · A2
また いなびかり。ゆかには たねが 一つ のこって いた。フリータが つかまえた。七つ。

サイズ M · B1
次のいなびかりで、ゆかにのこっていたのはたねが一つ。フリータがつかまえた。七つ。

サイズ L · B2
また稲光が光ったとき、ゆかにはたねがただ一つのこっていて、フリータがつかまえた。七つ。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説 · 13+
CEFRのレベルは目安です。

みんな 自分(じぶん)の サイズで。おなじ あらし。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

本当の あらし：どうする？

1. かみなりが 聞こえたら、遠くても 家の 中へ。かみなりは もう、あなたの ところまで おちてくるかも しれない。
2. おとなの 人と いっしょに 中に 入り、まど、ドア、ガラスから はなれる。おんしつ、はし、木、水には 近づかない。
3. さいごの かみなりから 三十分は 外に 出ない。
4. ぞうを 数えると、かみなりが 近いか 遠いかが わかる。おちつくのにも いい。でも、いつ 外に 出て いいかは わからない。

あなたの あらしを かぞえよう

いえの なかで：いなびかりから かみなりまで、ぞうを かぞえる。

いなびかり	ぞう	キロメートル (3とうで 1キロ、だいたい)	あの いなびかりは、ちかい？ とおい？
1	15	5	—
2	9	3	もっと ちかく